

氏 名	山城 久弥
博士の専攻分野の名称	博士（社会福祉学）
学位授与の日付	2021年 3月 31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	保育ソーシャルワーク実践の構成概念に関する研究 ーエコシステム構想による教育支援ツールの活用ー
論文審査員	主査 教授 小川 芳徳
	副査 教授 児玉 修
	副査 教授 川崎 順子
	副査 教授 清水 径子
	副査 教授 橋本 勇人（川崎医療福祉大学）

論文内容の要旨

第1章ではわが国の産業構造の変化に伴う、都市化や核家族化、女性の社会進出などによって、地域における子育ての孤立や家庭の養育機能の低下など、現代の子育て家庭を取り巻く環境の問題を取り上げた。そのうえで、政府における子育て支援対策の動向や保育所保育指針の改定の変遷について概観し、保育所機能の拡大や新たな役割について確認した。すなわち、保育所や保育士における「ソーシャルワークとは何か」について問題提起をした。

第2章では、保育とソーシャルワーク教育の関係について考察した。視点としては、保育士養成課程やリカレント教育としての研修において、どのようなソーシャルワーク教育が行われているのか概観し、保育士に対するソーシャルワーク教育の課題について言及した。保育士養成課程においては、量的・質的の両面においてソーシャルワークに関する教育内容は十分とはいえず、結果的に卒業後の研修などにおいて「学びなおし」が行われていること、専門的知識や技術の修得に課題があることを示した。

第3章では、保育における計画とソーシャルワークの展開過程、保育現場で用いられているアセスメントの内容について考察した。保育所における子どもの保育は、保育所の保育の方針や目標に基づき様々な保育計画が作成されている。こうした保育計画には、子どもや家庭のニーズを把握し、長期・短期目標を設定し、目標の達成にむけて家庭や関係機関と連携しながら進めていく過程が示されていることから、ソーシャルワークの展開過程と類似する点が多い。一方、保育におけるソーシャルワークのアセスメントに課題があることを示した。

第4章では、保育所や保育士が保育ソーシャルワークを実践していくにあたり、どのような視点や枠組みにおいて実践すべきかについて、「エコシステム構想」を手がかりに論及していく。エコシステム構想は、エコシステムの理論とコンピュータ・シミュレーションに基づいて、人の生活全体をシステムとして把握された状況が、どのように生活全体のバランスをとりながら変化していくのかを生態学的に理解することが可能である。また、その変容過程においては、変容を促進してきた要因について検討することで、その後の支援方法やソーシャルワークの実践活動に対する評価ができるなど、アセスメントの機能について考察している。

第5章では、エコシステム構想を保育分野に応用するために、「家庭」、「地域環境」、「実践環境」の3つの分野に関する調査研究を行う。家庭の分野については、親の子育て観に関する構成要素を明らかにするため、保育所を利用している保護者を対象にアンケート調査を実施した。あわせて地域環境の分野についても、保育所を利用している保護者を対象に、子育てにおける相談相手や協力者の実態についてアンケート調査を実施した。また、実践環境の分野については、保育士や保育所におけるソーシャルワーク支援の構成要素を明らかにするために、保育士を対象としたアンケート調査を実施した。以上の調査研究によって、エコシステム構想における保育ソーシャルワークの構成要素を明らかにした。

第6章では、第5章の調査研究で明らかになった保育ソーシャルワークの構成要素を基に、保育士のソーシャルワーク・トレーニング方法を提示し、本研究で活用した教育支援ツールの評価および検討を行った。つまり、ソーシャルワークのトレーニングプログラムの一貫として、教育支援ツールを保育者に試行してもらい、その評価と感想についてアンケート調査を実施した。その結果、本研究で明らかになった保育ソーシャルワークの構成概念は、保育者のアセスメントのスキル獲得や保育ソーシャルワークの理解を促進する効果が示唆された。

論文審査結果の要旨

1. 論文の内容

保育ソーシャルワークにおける教育支援ツールの作成、そしてその有用性の検討を目的にしている。保育におけるソーシャルワークの評価項目を、乳幼児、その保護者、保育所を対象に抽出し、現場での実施、その有用性について言及した。

2. 評価

保育におけるソーシャルワークの評価項目を因子分析により抽出し、その実施・有用性について検証したことは評価される。また、乳幼児ばかりでなく支援の対象となっている保護者や保育所といった環境面での評価に至ったことは有意義といえる。

3. 口頭発表（公聴会）ならびに口頭試問の評価

上記内容について簡潔、かつ丁寧な発表が行われた。質問に対する返答も的確であり、真摯な態度であった。

4. 審査結果

保育所や保育士に求められるソーシャルワークの機能について分析し、保育におけるソーシャルワーク実践のための教育支援ツールを作成することを目的としている。

保育士が担うべき職務は乳幼児の保育を司ることであるが、家庭での子育ての困難化に伴い乳幼児の保護者への子育て支援もその職務の一環として重視されるようになってきた。すなわち、親の子育て相談、親子交流の促進、地域の社会資源との連携・協働・開発などのコミュニティワーク等々、家庭生活全体を対象としたソーシャルワーク機能の実践が新たな役割として担うことになった。しかしながら、保育におけるソーシャルワークの内容はいまだ十分に整理されているとはいえず、保育におけるソーシャルワーク実践の評価が不十分といえる。そこで、保育におけるソーシャルワークの内容について、乳幼児、その保護者ばかりでなく保育所をも視野に入れた教育支援ツールを作成するに至った。

保育ソーシャルワークにおける教育支援ツールの特徴は、①乳幼児、保護者、保育所を対象にし、②保育におけるソーシャルワークの項目を整理したことにある。さらに、③教育支援ツールから得られた評価を数値化・視覚化し、④その有用性について言及している。

以上、これらの研究成果は、実践的な研究であることが評価され、社会福祉学の学位（博士）にふさわしいものと全会一致で承認された。なお、審査にあたった委員は、橋本勇人氏（川崎医療福祉大学教授）、兒玉修氏（本学教授）、川崎順子氏（本学教授）、清水径子氏（本学准教授）、小川芳徳（本学教授、委員長）の5名である。